

國學院大學學術情報リポジトリ

The Death of Fujitsubo in The Tale of Genji : From the Relationship with Hikaru Genji in the Death Scene

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kasuga, Miho メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000498

『源氏物語』 藤壺の死

— 臨終場面における光源氏との関わりから —

春日美穂

はじめに

『源氏物語』「薄雲」巻において、藤壺が薨去する。先帝の娘として生まれ、桐壺帝に入内しながら、光源氏と密通するといふ波乱の人生であったが、長年の冷泉帝への光源氏の後見に感謝の辞を述べながら、光源氏が傍らで見守る中で静かな死であつた。

その死は、「灯火などの消え入るやうにてはたまひぬれば」
〔薄雲〕二一四四七頁¹⁾とされ、『河海抄』以来指摘されるよ

うに、仏入滅にもたとえられる莊嚴なものとして描かれる²⁾。

死の描写の後には、諸注が官人薨卒伝の影響がみられると指摘する³⁾記述が続く。

かしこき御身のほどと聞こゆる中にも、御心ばへなどの、世のためにもあまねくあはれにおはしまして、豪家にこと寄せて、人の愁へとあることなどもおのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人の仕うまつることをも、世の苦しきとあるべきことをばとどめたまふ。功德の方とても、勧むるによりたまひて、いかめしうめづ

らしうしたまふ人など、昔のさかしき世にみなありけるを、これはさやうなることなく、ただもとよりの財物、得たまふべき年官、年爵、御封のもの、さるべき限りして、まことに心深きことどもの限りをしおかせたまへれば、何とわくまじき山伏などまで惜しみきこゆ。をさめたてまつるにも、世の中響きて悲しと思はぬ人なし。

〔薄雲〕二一四四七～四四八頁

藤壺の死の描写が薨卒伝を想起させる内容であることは、物語における藤壺の重さが感じられると同時に、国母としての藤壺の後半生を象徴的に表しているといえよう。藤壺の心ばえや行いの際立った様子が次々と語られる内容は、確かに他のどの女君の死とも違う、かつての中宮であり、現在女院たる藤壺の死を語る筆致としてふさわしいものように思える。一方で後藤幸良氏は、藤壺の死の表現が「消え入る」とされることで、その死を迎える過程そのものに焦点を当てて美的に荘厳されていること、その結果、藤壺への光源氏の熱い眼差しが浮かび上がったこととともに、藤壺の内部は闇に閉ざされていくことを指摘されている⁴⁾。松井健児氏は、「薄雲」巻の藤壺の死が公的な死である一方、「朝顔」巻での死壺としての出現は、「薄雲」巻で

はなしえなかつた「情愛の表現」として機能していることを指摘されており、藤壺の死についても様々な解釈がなされてきている⁵⁾。

藤壺の死は、仏入滅を想起させ、薨卒伝の形式を持つているという点で、『源氏物語』の中で他に類を見ない形となっている。それゆえに、死にゆく藤壺の有り様とはいかなるものであったか、死にゆく藤壺について、物語が何を描こうとしているのかについて改めて読み取っていかなければいけないのではないか。

本論は、藤壺の臨終場面の表現を検討することで、藤壺の死がいかなるものとして描かれているのかを明らかにしたい。

一、死を看取られるということ

藤壺の死は、「聞こえたまふほどに」〔薄雲〕二一四四七頁〕とあり、光源氏に自らの思いを語るなかでのものであった。もちろん、障屏具等がふたりの間をさえぎり、女房が取り次いでの話であったはずだが、光源氏に礼を述べながら息絶えるという藤壺の最期の、ごく近い場所に光源氏が立ち会っていたことは間違いない。

そもそも、死に立ち会い、その死を看取ることにはいかなる

意義があるのだろうか。それが顕著にあらわれるのが、六条御息所と紫の上の例である。光源氏は、六条御息所の死を看取ってはいないものの、臨終が近い御息所から齋宮についての依頼を受けている。その際光源氏は、「かかる御遺言の列に思しけるもいとどあはれになむ」（「滯標」二―三―三頁）と語っている。臨終近き場に立ち会い、後のことを託されたことに対して光源氏は、「いとどあはれ」という感慨を抱いている。自身と六条御息所の宿縁の深さを思つての感慨であるといえよう。さらに、「若菜下」巻、紫の上が仮死する場面において、女三の宮の元を訪れていてその場に立ち会えなかつた光源氏は、「いとあへなく限りなりつらんほどをだにえ見ずなりにけることの悔しく悲しき」（「若菜下」四―三―四頁）と紫の上に訴えている。その死を看取ることさえできなかつたという光源氏の嘆きである。これらの場面からは、死に立ち会い、死を看取ることが、少なくとも光源氏にとって、死にゆく女君との宿縁の深さを感じうるものであったことが理解される。したがって、藤壺の臨終に光源氏が立ち会えたということは、光源氏にとって藤壺との浅からぬ宿縁を痛感する機会となつたはずである。

しかし、藤壺の臨終に光源氏が立ち会っていることそのものには大きな疑問が残る。藤壺にとつて光源氏は夫でも血縁者で

もない。そうであるにもかかわらず、臨終の場、しかも女君の死の場に、親族ではない他者がいるのは奇異なものであるといえるのではないか。

『源氏物語』の中で、死を看取られる人物は、夕顔、一条御息所、紫の上、大君の四人である。夕顔（「夕顔」一―一―六七頁）、紫の上（「御法」四―一五〇―六頁）の死を看取つたのは光源氏である。一条御息所は、娘、落葉の宮がその死を看取っている（「夕霧」四―四―三八頁）。大君は薫によつて死を看取られている（「総角」五―三―二八頁）。夕顔と紫の上については、男女の仲にあつた光源氏に看取られており、関係性としては理解できる。藤壺の例に類似するのは大君の例であろう。藤壺と同じように、男女の仲にあるわけではなく、また親族でもない人物によつて看取られているからである。看取る側の薫と光源氏についても、臨終を迎える女性に思いを寄せているという共通点がある。一方で薫の場合、大君の葬送の場に立ち会っている様子が描かれており（「総角」五―三―一九頁）、実事はなかつたとしても夫に類する立場として振る舞っているといえる。さらに、そうした薫について、「内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひ多かり」（「総角」五―三―三二頁）と、帝からの弔問までもがなされてお

がわかる。したがって、薫が大君の死を看取るのも、周囲の人々から当然のこととして理解されていたといえよう。これは、光源氏が藤壺の死を看取ったことと大きく異なる点である。

以上の例からは、『源氏物語』において女君の死を看取る人物は、基本的に男女の仲にあった人、あったと周囲の人々が認めている人、子であることが理解される。このことをふまえると、藤壺の死を光源氏が看取るように描かれることこそが藤壺と光源氏との関係性、すなわちふたりの間に男女としての宿縁があったことを結果的に示すものとなっているのだ。

さらに考えたいことは、藤壺が皇妃であるという点である。皇妃の死とは、公的な側面を含むという点で、これ以前に検討した女君とは分けて検討しなければならないだろう。以上の点から、多くの皇妃の死が描かれる『榮花物語』のなかで、『源氏物語』前後の時代の皇妃で、臨終に立ち会った人物が明記されている事例を確認してみた。

以下は、村上天皇后、安子の臨終の場面である。

御はらからの殿ばら、君達、心を惑はしたまふ。かかるほどに、おほかたの御心地よりも、例の御事のけはひさへ添ひて苦しがらせたまへば、いとど、御しつらひし、御誦経

など、そこらの僧の声さしあひたるほどに、いみじう、宮は息だにせさせたまはず、(中略) やがて消え入らせたまひにけり。

(新編日本古典文学全集『榮花物語』)

巻第一「月の宴」一一四四〜四五頁)

出産から臨終を迎えた安子の死を看取ったのは、兄弟である伊尹、兼通、兼家らである。⁶⁾その後、宮中より子どもたちも呼ばれている。夫である帝が皇妃の臨終や死後の行事に立ち会うことはできないが、子どもたちは立ち会えたことがわかる例である。冷泉帝女御、超子が頓死した際には、兄弟である道隆、道兼、道長らが立ち会い(巻第二「花山たづぬる中納言」一一〇八〜一〇九頁)、花山帝女御低子の死去に際しては、父、為光が立ち会っている(巻第二「花山たづぬる中納言」一一三〇頁)。

以下は、一条天皇の後、定子の臨終の場面である。

「御殿油近う持て来」とて、帥殿御顔を見たてまつりたまふに、むげになき御気色なり。あさましくてかい探りたてまつりたまへば、やがて冷えさせたまひにけり。

（巻第七「とりべ野」一一三三六頁）

安子と同じように、出産とともに臨終を迎えた定子の死を、伊周や隆家など兄弟達が看取っている。以下、詮子の死を看取る道長（巻第七「とりべ野」一一三三三頁）、御匣殿の死を看取る伊周と隆家（巻第八「はつはな」一一三六九頁）、遵子の死を看取る公任（巻第十二「たまのむらぎく」二一九二頁）と、兄弟が皇妃の死を看取る例が多く描かれている。皇妃以外には、延子の死を看取る顕光（巻第十六「もとのしづく」二二二〇五頁）、東宮敦良親王妃嬉子の死を看取る道長（巻第二十六「楚王のゆめ」二一五〇七頁）と、父親が看取る例も確認できる。さらに、城子の死を看取る小一条院と禊子内親王（巻第二十五「みねの月」二一四六六―四六七頁）のように子どもが母親の死を看取るという場面も確認できる。

これらの『栄花物語』の例からは、皇妃の死を看取る人物としては兄弟が最も多く、以下父親、子どもの例があることが確認できた。このことは、皇妃が、死を迎える場として自身の実家に戻っていることが大きく関係していよう。『源氏物語』においても、桐壺更衣は桐壺帝に引き留められつつも、母北の方の懇願により里下がりが許され、実家で死を迎えている。死の

床にある皇妃を迎える実家の人々が、その死を看取るのは当然ともいえよう。

以上のことをふまえると、本来藤壺の臨終を看取るべきは、兄である兵部卿宮であったのではないか。事実、「賢木」巻での藤壺の出家に立ち会い、動揺し、悲しみの涙を流すのは兄兵部卿宮であった（「賢木」二一一三〇―一三三頁）。しかし、藤壺の病悩から冷泉帝の行幸（「薄雲」二一四四三頁）、そして臨終まで兵部卿宮が描かれることはない。本来そこにいるはずの兵部卿宮をあえて描かないことで、光源氏との関係性のみが浮かび上がるように描く物語の筆致があるのである。田坂憲二氏は、「滯標」巻において光源氏が、新帝と新東宮の伯父という立場を利用し、鬚黒と兵部卿宮が連帯することを防ぐために、兵部卿宮には「峻厳に断罪するかの如き対応」をとり、鬚黒一族には融和的な態度をとったと指摘されるが、兄兵部卿宮は藤壺から最期の言葉を残される対象としても除外されており、藤壺死後の冷泉帝の後見として選ばれなかったことが明確になる。兄兵部卿宮が描かれない一方で、『帳江入楚』は、藤壺臨終場面に光源氏が立ち会っていることに対し、「薄雲の臨終のさまも源氏君縁ありて此臨終にあひ給ふ也」としている。仏入滅にもたとえられる莊嚴な藤壺の臨終場面には、はっきりと光源

氏との男女の宿縁が刻み込まれているのであった。

二、事の乱れ

藤壺臨終場面が、光源氏との男女の宿縁に収斂されていることは、死を看取られるという状況以外に、臨終にかかわる表現からも確認することができる。

藤壺臨終場面には、「事の乱れなく」という表現がみられる。「なく」と打ち消されてはいるものの、『源氏物語』の「事の乱れ」の用例を確認すると、それは、男女のあやまりを想起させる表現であることが明らかになる。以下、用例を確認すると、まず、朱雀院が女三の宮を出家させることを決意する際、女三の宮が出家の身でありながら、男女のあやまりを犯す可能性を考える場面にみられる。

「さる御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命のほどにて、行く末遠き人は、かへりて事の乱れあり、世の人に譏らるるやうありぬべきことになん、なほ憚りぬべき」などのたまはせて、
〔柏木〕四一三〇五頁)

次の場面は、夕霧が花散里に落葉の宮の一件を説明する場面である。夫柏木の死後間もない落葉の宮との関係が「事の乱れ」とされている。

さがなく、事がましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに憚らることあれど、それにしも従ひはつまじきわざなれば、事の乱れ出で来ぬる後、我も人も憎げにあきたしや。
〔夕霧〕四一四七〇頁)

次の場面は、母、女三の宮のあまりに若い出家に、薫が、男女のあやまりがあつたのではないかと推測する場面である。

宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん、かく、思はずなりける事の乱れに、かならずうしと思しなるふしありけん、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつつむべき事の聞こえにより、我には気色を知らする人のなきなめり、と思ふ。

〔匂兵部卿〕五一二四頁)

以上の例は皆、男女のあやまりや望ましくない関係を示す例

である。それを考えた際、藤壺の「事の乱れ」の用例も、男女の關係に収斂される表現であると考えるべきである。

田中隆昭氏^③、久富木原玲氏^④が、この藤壺の薨卒伝に葉子の薨卒伝の揺曳を指摘されている。特に、久富木原氏の、「事の乱れ」と「乱りがはしきこと」が響き合っており、「事の乱れなく」と記された藤壺の崩御記事をいわば内側から、まさしく「事の乱れ」の事実がたしかに存在したことを暴き出しているのである」との指摘は、物語内の用例からも首肯される。

藤壺の臨終場面は、光源氏との男女の宿縁が、そして密通の事実が改めて刻み込まれるものとして機能しているのである。

三、人の愁へとなること―後見なき冷泉帝

「薄雲」巻の藤壺臨終場面について、光源氏に看取られていること、事の乱れが想起させられていることを述べてきたが、臨終の場面のなかでもうひとつ考えておきたい表現がある。それは、「豪家」にこと寄せて、人の愁へとあることなどもおのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の乱れなく」という本文の「愁へ」^⑤についての箇所である。「豪家」とは權威や權勢をさす語であり、藤壺ほどの身分や立場であれば、權威や

權勢をかさにきて人の愁へとなることも起こるはずであるのに、事の乱れがなかったと藤壺を讚える文脈である。確かに、光源氏との「事の乱れ」は隱蔽され、世間に明らかになることはなかった。しかし、藤壺は本當に「人の愁へとあること」がなかったといえるのだろうか。

以下の場面は、宇治八の宮が冷泉帝の東宮時代に政争に巻き込まれていたことが明らかにされる場面である。

源氏の大殿の御弟、八の宮とぞ聞こえしを、冷泉院の春宮におはしましし時、朱雀院の大后の横さまに思しかまへて、この宮を世の中に立ち継ぎたまふべく、わが御時、もてかしづきたてまつりたまひける騒ぎに、

〔橋姫〕五―二二五頁

この政争の主な原因として語られているのは、「朱雀院の大后の横さま」な様子である。しかし、そうした弘徽殿大后の介入を許す素地が冷泉帝側にもあったのではないか。そのことを端的にあらわすのは、冷泉帝に後見がないことが物語にたびたび描かれることである。

帝おりるさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、御母方、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。

〔紅葉賀〕二一三四七頁

桐壺帝は自らの讓位を見据え、冷泉帝立坊を希望する。しかし、その気がかりとなつたのは、「御後見したまふべき人」がないという点であった。藤壺の兄、兵部卿宮は、「親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば」という形で当初より後見から除外されている。桐壺帝は、藤壺を中宮にして立場を強め、後見のない冷泉帝の立場をも強めようとするのである。桐壺帝は、退位後もなお、「御後見のなきをうしろめたう思ひきこえて」〔葵〕二一七頁と冷泉帝を氣遣い、自らの死に際しても、「大将にも、朝廷に仕うまつりたまふべき御心づかひ、この宮の御後見したまふべきことをかへすがへすのたまはず」〔賢木〕二一九七頁と光源氏に後見を依頼している。そして、桐壺帝の言葉を守る光源氏もまた、「また後見仕うまつる人もはべらざるに、春宮の御ゆかり、いとほしう思ひたまへられ

はべりて」〔賢木〕二一二四頁と、冷泉帝に後見がないため、自身が行うべきであると認識しているのである。

その後、光源氏が須磨に退去し、その間に先述の冷泉帝廢太子問題があつたことが後に明らかになるが、そうしたことをふまえて朱雀帝が、自らの退位と冷泉帝への讓位を考えた際、やはり、「朝廷の御後見」〔明石〕二二六二頁を「する人物が必要であると考えている。以上のように、冷泉帝は常に後見の不在が問題視されているのである。頼りとなるのは光源氏だけであり、その光源氏も須磨明石に退去する事態となつている冷泉帝の状況は、弘徽殿太后らを中心とする一派によつて、廢太子が計画される素地が冷泉帝側にもあつたことを示している。

もちろん、この状況は必ずしも藤壺だけが作り出したわけではなく、桐壺帝が冷泉帝を立太子させたことに端を発している。そもそも、桐壺帝が光源氏の立太子をあきらめた理由は、「御後見すべき人」がないという点であつた。

明くる年の春、坊定まりたまふにも、いとひき越さまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく思し憚りて、色にも出ださせたまはずなりぬるを、〔桐壺〕二一三七頁

後見のいない皇子は、本来東宮になれる存在ではなかったことは、桐壺帝自身が重々理解していたのだ。冷泉帝立太子は、母藤壺が先帝の皇女であったこと、及び、光源氏が後見につくことが想定されたゆえに、桐壺帝が断行したことであった。そのような背景のなかでの光源氏の須磨退去は、藤壺としては想定できないことであり、幼い東宮である冷泉帝が廢太子の危機にさらされることは、藤壺ひとりの力で阻止できるものではなかったであろう。しかし、結果として世の乱れのもととなったという事実があるのだ。藤壺は「人の愁へ」となることがなかったように描かれていないのである。こうした冷泉帝の例と対照的なのが今上帝である。

大將は、この中將は同じ右の次將なれば、常に呼びとりつつ、ねむごろに語らひ、大臣にも申させたまひけり。人柄もいとよく、朝廷の御後見となるべかめる下形なるを、なかはあらむと思しながら、
〔藤袴〕三—三四二頁

今上帝にはおじ鬚黒が控えており、「朝廷の御後見となるべかめる下形」と確たる後見として描かれている。⁽¹²⁾ 実際、今上帝が

即位するとすぐに、鬚黒が右大臣となつて政權を担当している〔若菜下〕四—一六五頁。朱雀帝もまた、その是非はひとまずおくとしても、右大臣という強力な後見のもと、治世を行っている。このことを考えると、後見がおらず、実際に廢太子の危機にさらされた冷泉帝のような不安定な東宮の存在は、世の愁えであったはずなのだ。事実、光源氏は帰京後すぐに冷泉帝の後見として致仕大臣に摂政を依頼している〔濡標〕二—二八二—二八三頁。冷泉帝が一歳で即位した幼帝であるという点もあるが、後見の少なさを補う目的も大きかったといえよう。⁽¹³⁾ さらに、冷泉帝は即位後も後見が少ない存在として語り続ける。

藤壺が、前齋宮を冷泉帝に入内させようとした理由は「御後見」〔濡標〕二—三二二頁にさせようという思いからであった。その後、「薄雲」巻で、太政大臣が亡くなった場面においても、依然として冷泉帝は「とりたてて御後見したまふべき人もなき」〔薄雲〕二—四四二頁と描かれる。後見のない冷泉帝の姿は物語の中で繰り返し語られ、後見がないからこそ懸念、混乱が繰り返して描かれているのだ。本来ならば国母藤壺とその一族が後見として帝を支えるべきだが、親王であるという点で兵部卿宮の存在は語られず、ひたすらに後見のない冷泉帝、

ひいてはその母である藤壺の姿が繰り返し描かれている。

このことを考えたとき、「豪家にこと寄せて、人の愁へとあること」がなかったという文脈は、少なくとも冷泉帝の東宮時代の藤壺が「豪家」であったのか、藤壺の存在が「人の愁へ」とならなかったのかという問題として浮かび上がる。むしろ、

「豪家」と呼べるべき盤石な立場を築くことのできなかつた冷泉帝・藤壺母子によって、廢太子の計画という、最も人の愁えとなるべき事態が出来たといえるのではないか。藤壺の臨終場面の記述とは、世の愁えとなるような事の乱れを起こさなかつたと描かれることで、かえって世の愁えとなり、事の乱れまでもが起きた藤壺をこそ浮かび上がらせる記述となっていたのだ。

冷泉帝の後見については、藤壺死後、冷泉帝が夜居の僧都より秘事を密奏され、光源氏への讓位、及び、光源氏の親王への復位を打診した際も、「世の中の御後見したまふべき人なし」〔薄雲「二―四五七頁」〕と、しかるべき後見がいなくなつてしまふという理由で光源氏は、讓位はもちろん、親王への復位についても申し出を断つている。後見の問題は、藤壺の死後もなお、冷泉帝の課題として描かれ続けている。

そのことをふまえて藤壺臨終場面について改めて考えると、

藤壺はあくまで光源氏に冷泉帝の後見であったことについて「内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかはその心寄せことなるさまをも漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを」〔薄雲「二―四四六頁」〕と礼を述べたうえで、その謝意を日常的に伝えることができなかったことを残念に思っていると述べている。そこには光源氏への愛情を示す表現は全く描かれていないことを改めて確認する必要がある。藤壺が光源氏を、男君としてどう思っていたかは全く描かれず、冷泉帝の後見となつてくれた、その点にのみ触れているのであつて、そこに光源氏への個人的な思いを読み取る余地はない¹⁴⁾。

むしろ、藤壺本人の発言からは読み取ることができないにも関わらず、物語本文は、「事の乱れ」「愁へ」という語により、光源氏との密通と、その結果として生まれた冷泉帝の後見のなさを深く刻み込んでいるのだ。藤壺本人が光源氏をどのように思っていたかは描かれない。しかし、物語は、臨終の場面という藤壺の最期を描く場面において、藤壺の人生が光源氏との密通に集約されていることを残酷に描き出しているといえよう。今井源衛氏は、六国史の薨卒伝について、編纂事務担当者の個人的な見識才能に基づいて書かれていることを指摘される¹⁵⁾。藤

壺臨終場面においても、物語が選び取った藤壺の一生とは、最終的に光源氏との密通にあったといえる。

一方で、藤壺自身を選び取った光源氏との関係とは、あくまで冷泉帝の後見としての光源氏との関係のみであり、愛情、愛情にまつわる恨みは少なくとも表面上には一切描かれ⁽¹⁶⁾ない。仮に、藤壺が光源氏に愛情を抱いていたとしても、そうしたことは一切描かれず、冷泉帝の後見としてのみ光源氏と対峙する自制的な振る舞いであつたという点⁽¹⁷⁾に、藤壺その人の有り様が浮かび上がってくるのだ。

四、おわりに

以上、藤壺臨終場面における「事の乱れ」「愁へ」に着目しながら、藤壺の臨終場面が光源氏との密通をかたどり、世の愁えとなった藤壺の姿を浮かび上がらせるものとして描かれてい⁽¹⁸⁾ることを明らかにしてきた。

太田敦子氏は、同じく臨終場面の「財物」を「さるべき限り」〔薄雲〕二―四七頁〕捧げたという表現に着目され、仏事に対する篤い志に、藤壺の内面が抱える罪の意識が大きかったことを指摘される⁽¹⁹⁾。この指摘から、「事の乱れ」「愁へ」だけでは

なく、藤壺の臨終を書き記す物語の方法として、幾重にも藤壺の抱える罪、すなわち光源氏との密通を浮かび上がらせていることが改めて確認される。

湯浅幸代氏は、先帝の皇女の入内という点について着目され、歴史上の先帝皇女の入内から鑑みて、帝の寵愛を期待することが難しいこと、物語の藤壺も桐壺更衣の身代わりであり、歴史上の皇女たちのように、「薄倅の妃」となる可能性を示唆しつつ、光源氏との密通、冷泉帝の即位などの独自の展開を見せていることを指摘する⁽²⁰⁾。しかし、結果的に桐壺更衣の身代わりとなつたことも、光源氏と密通することになつたことも藤壺自身を選んで道ではない。その点において、小嶋菜温子氏が「あやにくな運命によつて、理想的な女性像を踏み外すことを余儀なくされ、その魂の平安をかき乱されずにおかなかつた」と藤壺と六条御息所の二人とをあわせて検証されたことは大変示唆的である。藤壺自身は、最後まで自制的であり、光源氏とも冷泉帝の後見として連帯しようとする。しかし、物語は残酷な筆致で藤壺の罪を最後まであぶりだす。

さらに藤壺はこのち、「いみじく恨みたまへる御気色」〔朝顔〕二―四九四頁〕で光源氏の夢に現れる。それを「おそはる心地」〔朝顔〕二―四九五頁〕と感じる光源氏からは、藤壺

が物の怪とおぼしきものとして現れたことがうかがえる。なぜ、藤壺がそのような形で光源氏の元に現れたのかという点についても、藤壺臨終の場面に鍵があるのではないか。死の間際であつてさえ、あくまで光源氏を冷泉帝の後見として見ようとした藤壺の思いを無にするように、光源氏が藤壺のことを漏らしたことに一因があるといえよう。¹⁰⁾

藤壺臨終場面とは、死するときまで自制を保ち、光源氏と、冷泉帝の後見として対峙しようとした藤壺自身の思いと藤壺の罪とを描き出す物語の相克を描いたものであつたのだ。

注

- (1) 本文の引用は小学館刊新編日本古典文学全集『源氏物語』により、巻名・巻数・頁数を付す。傍線等は適宜補っている。
- (2) 『河海抄』が、『法華経』『安楽行品』の影響を指摘して以来、諸注がそれを受け継いでいる(玉上琢彌編『黎明抄・河海抄』角川書店三五九頁)。
- (3) 岩波書店新日本古典文学大系脚注、小学館刊新編日本古典文学全集頭注など。咲本英恵氏は、藤壺の死の描写について、誄の形をとっていることを指摘される(「藤壺宮と紫上の死後の語り―誄との関わりから―」中古文学会二〇一八年度春季大会資料)。
- (4) 後藤幸良氏「桐壺更衣の死―仏教受容の様相をめぐって―」(『源氏物語と東アジア』新典社 二〇一〇年)。

(5) 松井健児氏「藤壺を夢に見る―『源氏物語』「朝顔」巻の叙述―」(『駒澤国文』五三号 二〇一六年)。

(6) 新編全集頭注巻第一「月の宴」―一四四頁頭注。

(7) 田坂憲二氏「鬚黒一族と式部卿官家―源氏物語における(政治の季節)―その二―」(『源氏物語の人物と構想』和泉書院 一九九三年)。

(8) 源氏物語古註釈叢刊『岷江入楚』「薄雲」二八〇頁。

(9) 田中隆昭氏「六国史后妃伝と藤壺の宮崩御の記事」(『源氏物語 歴史と虚構』勉誠社 一九九三年)。

(10) 久富木原玲氏「藤壺造型の位相―逆流する『伊勢物語』前史―」(『源氏物語と和歌の論―異端へのまなざし』青簡舎 二〇一七年 四七六頁)。

(11) 小学館刊『日本国語大辞典 第二版』(ジャパンナレッジ版)。

(12) 斎藤紗代氏は、冷泉帝への尚侍出仕が決まっていた玉鬘を鬚黒が自分ものにする事について、現東宮の「下形」としての自覚があつたことを指摘される(『源氏物語』鬚黒についての一考察)『成蹊国文』三五号 二〇〇二年三月)。今上帝の後見として、盤石な立場にあるという鬚黒の意識が垣間見られることから、今上帝の後見が確たるものであつたことが確認できる。

(13) 湯浅幸代氏は、光源氏が太政大臣を招聘することについて、盤石な国家を作り上げるために、一族の利益を優先する撰問とは異なる形を作り上げたことを指摘される(「濔標巻の光源氏―宿世の自覚と予言実現に向けて―」『源氏物語の史的意識と方法』新典社 二〇一八年)。

(14) であるという要素は不可欠である。

新編全集頭注は、藤壺の言葉に光源氏が「自分に対する藤壺の愛情の告白を感じ取るのである」(『薄雲』二一四四頁)と注を付すが、本文を読むかぎりでは、愛情の告白とは読めないことをいま一度確認す

る必要がある。

- (15) 今井源衛氏「漢文伝についての一問題」『類従国史』「人」部（『今井源衛著作集 第八巻』笠間書院 二〇〇五年）。
- (16) 鈴木宏子氏は、「賢木」巻の藤壺の光源氏への返歌について、藤壺母子が朱雀帝の治世を生き抜くために、光源氏の心を馴致することを求めたものである一方、感情を理性によって相対化し統御することを光源氏に求めることは、藤壺自身の姿とも重なることを指摘される（光源氏の渴望―物語の歌を読む豊かさ―『王朝和歌の想像力―古今集と源氏物語―笠間書院 二〇一二年』。藤壺は臨終の間際までまさに、感情を理性によって統御することを選んでいったといえよう）。
- (17) 藤井由紀子氏は、「藤壺の宮の「女心」が現れているとされる花宴巻の和歌」に、「直接的な愛情表現は見られない」としたうえで、「『源氏物語』の本文は、あくまで禁欲的に、藤壺の宮の姿を描き出しているのであった」と指摘されており、首肯される（相思相愛という「誤解」―光源氏と藤壺の宮の場合―（清泉女子大学キリスト教文化研究所年報）第二五巻 二〇一七年）。
- (18) 太田敦子氏「藤壺中宮と財物―『薄雲』巻を始発として―」（二〇一八年度國學院大學国文学会春季大会資料）。
- (19) 湯淺幸代氏「藤壺宮入内の論理―「先帝」の語義検証と先帝皇女の入内について―」（『源氏物語の史的意識と方法』）。
- (20) 小嶋菜温子氏「藤壺宮と六条御息所の「罪」と亡魂―秋好中宮にみる故・前坊家と六条院」（『源氏物語へ 源氏物語から』笠間書院 二〇〇七年 九二頁）。
- (21) 柳井滋氏は、藤壺の死霊の出現の背景に、光源氏の恋慕こそが藤壺の苦患の原因であると訴えることがあったと指摘される（『源氏物語の仏教思想』『源氏物語研究集成第六巻 源氏物語の思想』風間書房 二〇〇一年 一八二頁）。

付記

本論は、二〇一八年七月八日に金沢大学で行われた日本文学協会第三八回研究発表大会において口頭発表したものを礎としている。席上ご指導くださった方々に篤く御礼申し上げる。また、本論はJSPS科研費17K13394の研究成果の一環である。